

2011年 3月22日・「朝日新聞」では

何でこんなあぶねえもんば…

原発への警鐘 詩に乗せて

石巻出身の詩人・矢口さん、札幌の学習会で自作朗読

「この美^{うつく}しい所さ 何でこんなあぶねえもんば 作ったんだべがねーす」

東日本大震災で被災した宮城県石巻市生れの詩人で北星学園大名誉教授の矢口^{よりふみ}以文さん（78）が19日、札幌市であった市民学習会で、原発の安全性に疑問を投げかけるお年寄りを取り上げた自身の詩を朗読し、「危惧が現実となった」と語りかけた。

「この頃は ^{おつ} 大な地震がくる度に ここの原発が 大ちぐ踊るんだがすと 電力会社さんはその度に 頑丈に出来てえるがら 心配ばえらねえって 繰り返すんだげっとも 信じられねーす」

矢口さんが東北の方言でつづる詩は「女川町のおばあちゃんの話」。宮城県の女川原発近くに住む女性が主人公だ。最近出版した平和の尊さを問う詩集「詩ではないかもしれないが、どうしても言っておきたいこと」（コールサック社刊）に収録した。

親類は宮城県で暮らす。「父の郷里は集落が津波で流されたと聞いた。妹は無事が確認されたが、兄はまだ安否が分からない。地震は怖いです」。朗読を終えると「女川の危惧が福島で現実となった。危険性があるのにどうして作るのか」と静かに語りかけた。

学習会は札幌市西区の「山の手九条の会」が開いた。平和の大切さを考えようと企画したところ、大震災が起きた。講師に招いた矢口さんが被災地の出身で原発の安全性にも関心を持つことから大震災と原発についてもテーマとした。

と紹介されています。